

産婦人科感染症の診断・管理 その秘訣とピットフォール

産婦人科における感染症領域には、①性感染症、②不妊と関連する感染症、③母子感染症、④早産の原因としての周産期感染症、⑤腫瘍の原因となりうる HPV 感染、⑥周術期感染症、など大きなテーマが多く含まれている。また感染症は、腫瘍、周産期、生殖内分泌、女性ヘルスケアのいずれのサブスペシャリティとも関連した横断的な分野であり、さまざまな現場で感染症の知識を必要とする。そのため、産婦人科感染症に関する知識は、サブスペシャリティを超えて、臨床医、特に若手医師にとって必要不可欠と言える。

産婦人科感染症領域では、トピックスが目白押しである。この数年急増している梅毒・先天梅毒、サイトメガロウイルス (CMV) やトキソプラズマの母子感染症、ウレアプラズマと早産、HPV 感染から子宮頸がんへの発がんとその予防のための HPV ワクチン、A 群溶連菌感染症 (GAS) による周産期感染症などが挙がる。一方で、従前から産婦人科で問題となってきた性器クラミジア、性器淋菌感染症、性器ヘルペス、HBV・HCV・風疹・HTLV-1 の母子感染の感染症などでは多くの臨床研究の成果が体系化されてきた。

感染症は、日常診療において最も多い疾患領域であると言っても過言ではない。最新かつ正確な知識を統括的、系統的にまとめておく機会がほしいものである。本邦においては、日本産科婦人科学会・日本産婦人科医会の産婦人科診療ガイドライン産科編、外来編などで断片的にはガイドラインとしての記載があるが、産婦人科感染症に特化した系統的なガイドライン・マニュアルは存在していない。現在、日本産婦人科感染症学会がマニュアルを作成していることから、ぜひとも診療のバイブルとしてその完成を待ちたいところである。

本増大号では、産婦人科に特有の感染症全般について、病原体別に感染症の基礎を理解したうえで、臨床現場に繋げるような構成にした。臨床現場で判断が困難な場面に遭遇した際に、その手がかりとなる知識をエキスパートの先生方によって詳説していただいた。感染症領域の臨床に苦手意識のある若手医師などが、本増大号を一読することでスペシャリストの知識と理解を得て、臨床の場で活用できるものと考え。ガイドラインに記載するほどではないが、実臨床で役立つ秘訣、ピットフォールを各分野のスペシャリストの先生方から学ぶ場を提供することで、マニュアル、ガイドラインを補うべく産婦人科感染症の臨床現場で一助になることを期待している。

川名 敬 (日本大学医学部産婦人科)